

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年8月6日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 白眉センター／人文科学研究所

職 名・学 年 特定准教授

氏 名 MAK, BILL

助 成 の 種 類	平成27年度・研究者交流支援・国際研究集会発表助成／一般	
研 究 集 会 名	16回世界サンスクリット会議(16th World Sanskrit Conference)	
発 表 題 目	Silpakorn University / International Association of Sanskrit Studies	
開 催 場 所	タイ・バンコク	
渡 航 期 間	平成 27 年 6 月 28 日 ～ 平成 26 年 7 月 2 日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(出席証明書)	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	150,000 円
	使用した助成金額	150,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券運賃: 57,250 円
		ホテル宿泊料: USD 626.10 = 76,898 円
		シャトル(日本): 7,200円
		シャトル(バンコク): THB 1000= 3,635円
市内交通費(バンコク): THB 1500= 5,452円		
合計150,435円		
上記に充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今年様々な国内外共同研究の関係で、国際発表は意外に多いので、助成は大変助かります。	

成果の概要／Mak,Bill

2012-2014 ギリシャ系インド天文書に関して新発見のサンスクリット写本に基づいた成果を16回世界サンスクリット会議で発表を行なった。Yavanajātaka の新しい修訂版の作業について紹介した。学界に注目を集めている新発見 Yavanajātaka 写本に関する成果を講演した。

題目： 新発見写本に基づく新しいヤバナジャータカの修訂版

A new edition of the *Yavanajātaka* based on the newly discovered manuscripts

発表内容

2012年、Pingree の1978年の校訂本には使用されていない *Yavanajātaka* (以下 YJ) の新しい写本が、NGMPP の写本コレクションの中から発見された。この写本から、そして特に、数学的な天文学を扱った最終章 (horā と名付けられた第79章) から得られた新しい読みは、この、歴史的に重要なギリシャ系インド天文学のテキストの新しい解釈を示すためには必要不可欠である、ということが次第に明らかになってきた。YJ の新しい読みにもとづく新解釈によってなされたこのテキストに関する最も重要な発見は以下の通りである。

1. このテキストはギリシャ語のテキストの翻訳である、というこれまでの主張は誤りで、むしろ、この作品に見られる天文学についての言い回しは、*Vedāṅgajyotiṣa* などの初期のサンスクリット語天文書と関連がある。
2. このテキストの正確な年代は、全くもって確定していない。というのも、これまで承認されてきた年代、すなわちこのテキストの奥付にもとづく、いわゆる *bhūtasamkhyā* による日付の箇所は、Pingree 自らによって校訂された箇所であり、それは単に推測による日付に従ったものに過ぎない。ただし、このテキストの歴史的な位置付けは、これと密接な関係にあるテキスト、Minarāja による *Vṛddhayavanajātaka* 等の、他の *jyotiṣa* テキストとの比較によって決定されるだろう。
3. このテキストにおける *bhūtasamkhyā* の表現についての定説、あるいは、サンスクリット語テキストにおける最も初期のゼロの使用はこのテキストにおいてである、といったこれまで承認されてきた他の主張も、もはや擁護することはできない。

このテキストの内容を判読した、という点においては、Pingree の業績は、決して葬り去られるべきものではないが、テキストの数々の欠落部分の補完も含めて、このテキストの正確な校訂作業は、この新しい資料にもとづいてなされ得るのである。とくに、Pingree が校訂した際に使用していた写本の読みは、Pingree が考えていたほど悪いものではなかった、ということが明らかになったのである。本発表では、筆者による発見の概要と、YJ の新しい校訂作業に際する要点を紹介することにする。

YJ 天文学の歴史的な位置づけ

このテキストで示されている天文学や数学は、Āryabhata のものといった後代の天文書ほど洗練されてはおらず、Varāhamihira の *Pañcasiddhāntikā* (以下 PS) における記述のようなより古い Siddhānta と比べても、洗練さに欠けている。しかし、YJ の天文学に関する数値と計算法を、他の Siddhānta と比べたところ、太陽年、恒星月などの数値が、PS に含まれている Saurasiddhānta と Romakasiddhānta に一致し、YJ に採用されているそれらの数値よりも高度であることが明らかになった。太陽年の長さの誤りの原因であろう、1 ユガ = 165 年という短い周期のために、YJ の年代を PS に含まれる Siddhānta よりも前とも想定されうるが、他の要

素である恒星月などの長さは驚くほど正確である。

数理天文学の記述は正確さに欠けるが、それはおそらく、年代的な理由ではなくこのテキストの性質を考えなければならない。YJ は、数理天文学の部類 (*ganita*) に属する独立した作品というよりはむしろ、占星術の助けとなるような補遺のような実用作品であり、それ故、数理天文学の厳密さを欠いているのである。

結論

上記の議論から、Pingree が主張するように、YJ は 2 世紀中頃のギリシャ語の、今や散佚してしまったアレクサンドリアのテキストを、散文のサンスクリット語に翻訳したものを韻文にしたものである、という証拠は、たとえあったとしても、非常に弱いものである、ということが明らかになった。このテキストで使用されている専門的な概念や、数学に関する言い回し、内容全般といった要素から、このテキストは、インド化したギリシア人が、それ以前に存在していたインドの伝統にもとづいて、ギリシアの天文科学とインドのそれとを融合させようと試みた最初のものであるように思われる。Bhāskara や Utpala といった後代の著者によって引用されていることから、YJ が印度天文学に関する現存するサンスクリット語テキストの最も古い部類に属するということは明らかであるが、Gargasamhitā や、おそらくさらに重要な Vrddhayavanajātaka などのテキストと YJ とをより厳密に比較検討することによって、YJ の正確な歴史的な位置付けを確定することが可能になるだろう。